学校支援の行動分析的アプローチの動向
―内外論文から―

臨床心理学科　宮 下 照 子

はじめに

2006年の文部科学省の「学校教育法等の一部を改正する法律」(2007年４月から施行）によって、「通級による指導の対象とすることが適当な自閉症者、情緒障害者、学習障害者又は注意欠陥多動性障害者に該当する児童生徒について」も教育的援助、支援を行うべきことが法の下に規程された。「特殊教育」と過去に言われてきたことが、「特別支援教育」と言葉が変化したのみならず、その内容もかなりの分類化が行われ、それぞれの援助法を考慮しようとする姿勢と受け止められる。

このような背景の中で、学校現場はまだ十分な対応が出来ていない現状は確かである。学校教育者はもとより、スクールカウンセラー（臨床心理士)、学校臨床心理士など、色々な立場の人たちが支援を行っていることは事実であるが、より効果的な方法を提示するのが専門家の仕事である。

本稿は臨床心理学の中でも、応用行動分析と言われる方法が、米国を中心に学校支援の場にも適用され、多くの成果を上げていることを踏まえ、我が国でも応用行動分析の方法が学校現場へどの程度適用されているかを、論文を通して検討する。2008年に、道城・野田・山王丸が1990年から2005年までの16年間の「学校場面における発達障害児に対する応用行動分析を用いた介入研究のレビュー」を発表している。従って、本稿ではそれを継続した形で、5年を経過した今の研究の動向、方向性を見ることが目的である。

応用行動分析について

行動分析（behavior analysis）とは精神分析を意識した、スキナーの造語である。行動分析とは「個体と環境との相互作用を明らかにする学問」（大河内、2007）であるとか、「人間や人間以外の動物の行動には、それをさせる原因があるのであり、行動分析（学）はその原因を解明し、行動に関する法則を見出そうとする科学なのである。」（杉山、2005）という説明がわかりやすいと思われる。すなわち、人や動物の「行動（behavior)」には、探索的（特に理由も無く）ということを除いて、その原因、根拠があるのは当然である。そのメカニズムを明らかにするのが行動分析である。それを実際の日常的なことがらや問題に行動分析の原理、方法を応用するのが「応用行動分析（applied behavior analysis)」である。さらに、「機能分析(functional analysis)」という語がある。これは実際に行動分析をするとき、対象とする行動がどのような機能をしているのかを分析することになるので、「機能分析」という語になる。「行動」が起こるには必ずトリガーとなる「先行刺激(antecedent: A)」があるはずである。そして、行動(behavior: B) 、その結果(consequence: C)

があり、それらの３つがどのように関係しているかを分析する。従って、A-B-C分析と呼ばれることもある。これがスキナーの行動理論の三項随伴性である。

このようなことを分析するための客観的な技術は「行動観察」である。たとえば、注意欠陥多動性症候群（ADHD）の小学校２年生の児童（A君）の例で説明する。A君は学校で多動状態が多く、十分に勉強ができず、いつも教師や母親から叱られている。しかし、いつも多動であるわけではない。それでは疲れてしまって動けなくなる可能性がある。従って、どのような時、どのような場面でA君は多動になるかを少なくとも１週間くらい観察する必要がある。学校場面が最も問題が生じやすいので、朝、登校してから下校するまで、学校でA君の多動の状態を厳密に観察する。登校時に、友人に「おはよう」と言われれば、多動が少なくなることも判った。また、教室で、すっと自分の席に座れれば、案外落ち着く。また、鉛筆など落としてしまったものを友人が拾ってくれれば、この場合も落ち着く。教科書が巧くカバンから出せたら、この時も比較的安定している等などの事実が出てきた。友人に偶然であるがぶつかられた時は、多動が出現した。このような観察から、多動が出現する状況をある程度絞ることが可能である。

表１　A君の機能分析（観察者が行った）

多動になる直前にあったこと	A 君の行動	結果
教師から教室に速く入るように肩を押された	嫌がって、廊下を走り回った	教室に入って、授業を受けられなかった
給食の時に当番であったが、巧く食器に均等に入れられなかった	当番の仕事を放棄して、教室から出て、運動場を走り回った	教室で給食を食べられなかった（保健室で食べた）
下校時に手が引っかかり、ランドセルをひっくり返してしまった	ランドセルを放り出し、走り回った	教師に叱られ、友人に手伝ってもらって、ランドセルの中にしまうことになった

表１の結果から、A君の多動は予期しないネガティブなことが起こったとき、友人が援助してくれなかったとき、自分のすることが適切に遂行できなかったときなどにまとめられる。また、A君は手先が不器用なことも明らかになった。他人との関わりが不安定であることも判明した。結論的にはこれらの先行状況をなるべく作らないように工夫することが、多動を減少させることになる。それではどのように介入していくのか。手先が不器用なことは本人の特性であり、この訓練は個別に行われるべきである。手先に力がいるブロック遊び、折り紙、はさみを使って何かを作るような遊びを家庭ですることがまず考えられる。それから、他人との関わりの問題は社会的スキルになるであろうし、このことは教育界で取り組まれようとしている問題でもある。クラス全体の介入として、取り組む必要があろう。たとえば、掃除当番の時、ルールを明白に決め、どのようにA君の相手を組んで、A君をサポートするのかとか、A君が巧く出来たときに、一緒に掃除当番をしていた級友が褒めることも大切である。その日の出来た結果を表にして、上手に出来たときはA君の好きなシールを貼っていくとかの工夫が必要になる。このような介入は、A君の性格はもちろん、そのクラスの特徴を考慮して計画されるものである。

方　法

1　論文の収集方法

論文は内外共、2006年から2010年10月までの発行を対象にした。前述の道城らの対象にした学術誌、つまり、Behavior Modification, Journal of Applied Behavior Analysis(JABA), Journal of Behavioral Education, Journal of Behavior Therapy, Journal of Behavior Therapy and Experimental Psychiatry, Psychology in the Schools, Child & Family Behavior Therapy と日本の論文としては、行動分析学研究、行動療法研究、特殊教育学研究から選出した（道城らは教育心理学研究も含めていたが、該当論文が16年間で０であったので本稿では省いた）。外国論文の検索に関しては、上記の７つの学術誌の2006年から2010年10月までの論文のabstracts を参照し、「学校内での行動分析的介入」に該当するかどうかを筆者が選出した。さらに、それぞれの学術誌で、class-wide intervention のキーワードで再度検索した。ほとんどの論文は筆者が選出した論文と一致した（外国論文に関してはアメリカ心理学会[APA] のデータベースを使用した。また、JABA は直接アクセスした）。日本の学術誌に関しては実際に学術誌を見たものと、CiNii で検索したものがある。日本の論文に関しても、abstracts を参照し、選出したが、判り難いものは本文を見た。

2　論文選出の条件

①　学校内で実際に行動分析的な介入が行われているもの　②発達障害、情緒障害、行動障害のいずれかを介入の対象にしていること　③幼稚園児から小学生、中学生、高校生のどれかを対象にしていることの条件を満たしている論文であることを条件とした。

②　総論、論説、レビュー論文は除いた。

結　果

学術雑誌別の選出した論文数を表２に示す。表２から見られるように、道城らの16年間のレビューと筆者の５年弱の結果を単純に比較はできないが、筆者のデータでは、外国論文の数は道城らのほぼ半分あり、これは収集期間を考えると、論文数の割合は増加傾向であると言える。一方、国内の論文数は70（2005年まで）と今回19で、国内論文の数が70の３分の１もなく、少なくなっていることになる。筆者の場合は、発達障害だけでなく、知的には普通であるが情緒障害、行動障害がある場合も含めている。従って、それでも、国内の論文数が少ないのにはどのような事情によるのであろうか。

筆者の選出基準に合った国内19論文と、海外の論文が多く選出されたJABAの14論文の題目を掲げ、その差異をまず検討したい。

☆行動分析学研究

○特別な教育ニーズのある中学生の学業適応促進を目指した校内支援体制の整備(2006)

○通常学級における集団随伴性を用いた介入パッケージが授業妨害行動に及ぼす効果の検討（2010）

☆行動療法研究

○引っ込み思案幼児への社会的スキル訓練―相互作用の促進と問題行動の改善―（2007）

○保健室登校児への教室登校支援（2007）

○攻撃的行動を示す特定不能の広汎性発達障害の児童に対する機能的アセスメントを用いた介入（2008）

○模擬授業場面における就学前の発達障害児の授業準備行動に対する行動的介入（2008）

○自閉症児におけるボードゲームを利用した社会的スキル訓練の効果（2008）

○アスペルガー障害児童の授業参加行動への自己管理手続きを用いた学級内介入（2009）

表２　学術雑誌別の対象論文数

学術雑誌	2006年から2010年の５年間						
	06	07	08	09	10	Total	道城らの結果
Behavior Modification	2	2	1	2	0	7	2
Journal of Applied Behavior Analysis	4	3	2	2	3	14	29
Journal of Behavioral Education	0	4	1	0	1	6	44
Journal of Behavior Therapy	0	0	0	0	2	2	0
Journal of Behavior Therapy & Experimental Psychiatry	0	0	0	1	1	2	5
Psychology in the Schools	1	3	0	2	5	11	14
Child & Family Behavior Therapy	1	1	1	1	1	5	9
Others	2	0	0	1	1	4	
外国論文の合計	10	13	5	9	14	51	103
行動分析学研究	1	0	0	0	1	2	14
行動療法研究	0	1	4	1	2	8	5
特殊教育学研究	1	3	2	2	1	9	51
国内論文の合計	3	5	7	3	4	19	70
						70	173

○小学生に対する学級単位の社会的スキル訓練が社会的スキル、仲間からの受容、主観的学校適応感に及ぼす効果（2009）

○中学生に対する問題解決訓練の攻撃行動変容効果（2010）

☆特殊教育学研究

○発達障害のある生徒の余暇活動の自発的開始の指導―知的障害養護学校における休み時間の変容を通してー（2006）

○通常学級での授業参加に困難を示す児童への機能的アセスメントに基づいた支援（2007）

○通常学級に在籍する発達障害児の他害的行動に対する行動支援―対象児に対する個別的支援と校内支援体制の構築に関する検討―（2007）

○自閉症者が示す激しい攻撃行動に対する低減方略の検討―兆候行動の分析に基づく予防的支援―（2007）

○授業参加行動に困難を示す生徒に対する支援―病弱養護学校在籍児における「カリキュラム介入」技法の適用―（2008）

○発達障害児の集団における社会的コミニュケーション環境についての検討―（2008）

○小集団指導における知的障害児童の課題遂行を高める先行条件の検討―物理的環境と係活動の設定を中心にー（2009）

○Physical Arrangements and Staff Implementation of Function-Based Interventions in School and Community Settings. (2009)

○Function-Based Interventions for Behavior Problems of a Student With a Developmental Disability: School-Based Treatment Implementation. (2010)

☆Journal of Behavior Analysis (JABA)

○A Descriptive Assessment of Instruction-Based Interactions in the Preschool Classroom (2006)

○The Effects of Fixed-Time Reinforcement Schedules on Problem Behavior of Children with Emotional and Behavioral Disorders in a Day-Treatment Classroom Setting (2006)

○A Computerized Test of Self-Control Predicts Classroom Behavior (2006)

○Effects of Training, Prompting, and Self-Monitoring on Staff Behavior in a Classroom for Students with Disabilities (2006)

○Evaluation of a Classwide Teaching Program for Developing Preschool Life Skills (2007)

○A Comparison of Performance Feedback Procedures on Teachers' Treatment Implementation Integrity and Students' Inappropriate Behavior in Special Education Classroom (2007)

○Comparing Functional Analysis and Paired-choice Assessment Results in Classroom Settings (2007)

○A Social Stories Intervention Package for Students with Autism in Inclusive Classroom Settings (2008)

○A Preliminary Comparison of Functional Analysis Results when Conducted in Contrived versus Natural Settings (2008)

○Discrepancy in Functional Analysis Results across two Settings: Implication for Intervention Design (2009)

○An Evaluation of the Relative Efficacy of and Children's Preference for Teaching Strategies that Differ in Amount of Teacher Directedness (2009)

○The Effects of Fixed-Time Escape on Inappropriate and Appropriate Classroom Behavior (2010)

○Functional Analysis and Treatment of Elopement across two School Settings (2010)

○Evaluation of Combined-Antecedent Variables on Functional Analysis Results and Treatment of Problem Behavior in a School Setting (2010)

考　察

出来れば、行動分析的アプローチでない学校支援の論文との比較をしたかったが、その時間がなかったので、行動分析的アプローチの現状の分析に留まる。また、前述の道城らの論文の中の論文をカテゴリーに分けるような細かい分類もしていない。つまり、介入の対象の学校、学級、指導場面、対象者、標的行動（変容目的の行動）の分類は数も少ないので、あまり意味がないと考え行わなかった。また、論文の表題を比較してみると、class setting という語が外国論文ではほとんど使われている。国内論文でも実際には学級内、あるいは学校内での介入であるが、著者の意識も学級内の直接の介入が大切であるという意識が低いのではないかとも採れる。限定された地域、あるいは関わりが出来るところでしか、我が国では行動分析的介入が学級内で行い難い現状があることは歪めない。また、本稿では外国論文とそれに類似した内容の国内の論文の概要を紹介しその差異を見ることで、我が国の論文数の少なさが、研究の質的問題があるのか、適用時の社会的認識の問題なのかも考える材料になると思われる。。

まず、JABAに掲載されたFunctional Analysis and Treatment of Elopement across two School Settings(Russell Lang, et al., 2010)の論文の概要を記する。

対象者は４歳のアスペルガー症候群と診断さ

れた男児（J君）である。Elopement（逃げ出す）が修正の目標行動になり、椅子から立ち上がるとか、セラピストから逃げる、部屋のドアーに向かって走っていくこととここでは定義されている。「逃げ出す」行動はセッション中に間欠的に10秒間測定された。標的行動（逃げ出す）はセッション中の合計回数を測定回数（10秒１回の測定の回数）で割ったものがデータとなる。標的行動の測定はＪ君のいつもいるクラスルームとリソースルーム（ここでは個人的な教育を受けている）で行われた。クラスルームには、２～３人の教師（データ収集のため）と発達遅滞の他の6人の子どもがいた。クラスルームでは子どもたちが小グループに分けられたり、マンツーマンになることもある。セラピストは部屋の真ん中のテーブルの所にいて、ドアーも見える。リソースルームではJ君とセラピストと１～２人のデータ収集者がいる。J君とセラピストはここで課題に取り組む。J君が逃げ出すような時には、セラピストは彼を言葉や身体的接触で連れ戻す。テーブルの所に連れ戻してから、５秒はこのようなことが続く。課題中に、５秒以内に要求に反応しなければ、セラピストは正反応を示すために、ジェスチャーややり方のヒントを出す。まだ反応しなければ、セラピストは身体的介助を行ってさせる。J君はテレビが好きであるので、「逃げ出す」とテレビを点ける強化子である。遊び中は自由に遊ばせ、言語的賞賛や身体的接触を行い、「逃げ出す」のも無視する。行動変容条件はABABデザインで、Aがリソースルームでの場面で、Bがクラスルームである。介入に入る前のベースラインのデータ（逃げ出す回数）は30分間、A、Bそれぞれの場面で測定された。まず、J君に注意を向ける介入では、セッション中、J君のそばにいつも教師がいて、彼のことを見ている条件である。教師は30秒ごとに言語的賞賛と身体的接触をする。教師は逃げ出す行動を阻止するために、部屋のドアーを閉める。もし逃げ出す行動が起こったら無視する。次に、接触することを目的にした介入では、J君のクラスルームにあるDVDに連続的に近づいたり、非連続的な接近を目標にした。教師は他の子どもたちといるか、J君から２メートルほど離れ、彼と関わらないように他児に教示する。つまり、教師はJ君に接触や注意を向けない。J君はクラスルームで小さなテレビ画面を見つめていた。機能分析結果では、リソースルームで、注意を向ける条件では「逃げ出す」行動は一定して上がっている。クラスルーム場面では、接触条件では一定して増加している。また、クラスルームの方が逃げ出す行動の割合は高くなっている。介入の分析結果では、リソースルームで、接触での介入よりも、注意を向ける介入の方が、逃げ出す行動は下がっている。対照的に、クラスルームでは、接触での介入の方が注意を向ける介入よりも、逃げ出す行動は下がっている。この研究は手続きが複雑で、これらの結果は機能分析の時と逆になり、それは効果と言えるかどうか微妙である。また、強化子が明白でない欠陥はある。

次に国内の論文を紹介する。「アスペルガー障害児童の授業参加行動への自己管理手続きを用いた学級内介入；五味他、2009」である。対象児の年齢は異なるが、海外の論文と同じアスペルガー症候群を扱っている。対象児は小学校５年生の男児（A君、10歳８カ月）で、過去に注意欠陥多動障害、アスペルガー症候群の診断を受けている。10歳１カ月時のWISC-IIIの全検査IQは64で、軽度の発達遅滞である。新しい場面や人に対する不安が強く、担任でない教員が声をかけても反応がない、授業中に離席、床に寝転ぶような問題行動が見られる。通常学級おける学習参加を標的行動にしている。学習面ではすべての教科において２～３学年の遅れが見られる。本研究は第一著者がコンサルタン

ト、担任教師及び特別支援学級教員が手続きを実施するコンサルティとなり支援をした。アセスメントは通常学級の国語と算数の授業場面の行動観察である。学級の人数は27名である。介入法は論文の表題のように、自己管理手続きである。これはセルフモニタリングである。ここでは、課題従事を記録する自己モニタリング（self-monitoring attention; SMA）を訓練する。実際に学級で実施する前に、事前のトレーニングをB大学のプレールームで行っている。SMA条件で、授業開始時に担任がA児に自己記録用紙の入ったファイル、腕時計を手渡す。腕時計は2分間のインターバルで振動するように設定されていて、A児は自分でタイマーを作動させるボタンを押し、振動に合わせて自分の行動を指定の用紙に記録することが求められる。学習に参加していれば○、２点、読書なら△、１点、離席なら×、０点を自分で記録し、点数を合計する。その用紙を授業終了後に言語で賞賛され、基準を満たしていれ強化子が出る。強化子は、週２回の個別指導の場面で、１枚につき５分間のゲームができる引き換え券である。さらに、SMA条件と強化子選択条件に移行した。これは、自己モニタリングと強化子の変更とグラフ・フィードバックの導入である。強化子は「ゲーム30分」、「おやつ１品」、「キャラクターカード１枚」の中から選択できる。強化基準を満たしたとき、選択した強化子の引き換え券がもらえ、母親に渡すと、その日に過程でバックアップ強化子と交換できるのである。介入の効果の観察では、国語の授業で、離席はベースラインで16.5%であったが、SAM条件で段階的に減少し、7.5%となった。算数の授業でも離席は同じように減少した。しかしながら、課題従事の面では、算数よりは国語の授業時間の方が課題を長くしていたが、変動が大きく成功したとは言いがたい結果である。

以上、国内外の２つの論文を見てきたが、論文から読み取れない部分もあり、必ずしも成功例と考えられないが、学級内でそれぞれの工夫が行われている。外国論文の場合、ほとんどがClassroom Settingという語が表題に使われ、現実の学級の場で介入が行われているのが明白である。それが支援として通常であり、その上で、介入に適切なプログラムの構築に向けられていると思われる。そして、問題に応じた改善プログラムの開発の方向に向いている。一方、我が国では、行動分析的な介入が必要であることは言われているが、その使用については限定的であるようである。このような知識をもつ専門家が少ないことも一つの原因であろうが、教育界の考え方の硬さがこの行動分析的介入を阻んでいる可能性もある。心理臨床領域において、未だに精神分析を中心にした力動心理学の優勢が残っていることを考えると、新しいことへの抵抗があるようである。ただ、外国の研究例のように、国内でも、障害のない健常児に対して、社会性スキルの訓練が幼稚園や小学校の低学年で行われ始めているのは、障害児だけの問題でなく、広く教育支援という観点からの建設的な動きとして評価したい。

【引用文献】

網谷優子・武蔵博文　2008　発達障害児の集団における社会的コミュニケーション環境についての検討―「発表者」「聞き手」の役割学習の効果―、特殊教育学研究、45,5,265-273.

在原理沙・古澤裕美・堂谷知香子・田所憲次・尾形明子・竹内博行・鈴木伸一　2009
小学校における集団社会的スキル訓練が対人的自己効力感と学校生活満足度に及ぼす影響、行動療法研究、35,2,177-188.

Berg, K. Wendy David P. Wacker, Karia Cigrand, Steve Merkie,Jeani Wade, Kim Henry,& Yu-Chia Wang　2007　Comparing Functional Analysis and Paired- Choice Assessment Results in Classroom Settings.　Journal of

Applied Behavior Analysis, 40,545-552.
Chan M. Jerrrey & Mark F. O'Reilly 2008 A Social Stories Intervention Package for Stidents with Autism in Inclusive Classroom Settings. Journal of Applied Behavior Analysis,41,405-409.
DiGennaro D. Florence & Brian K. Martens & Ava E. Kleinmann 2007
A Comparison of Performance Feedback Procedures on Teachers' Treatment Implementation Integrity and Students' Inappropriate Behavior in Special Education Classroom. Journal of Applied Behavior Analysis, 40,447-461.
Dolezal N. Danielle & Patricia F. Kurtz 2010 Evaluation of Combined-Antecedent Variables on Functional Analysis Results and Treatment of Problem Behavior in School Setting.
Journal of Applied Behavior Analysis,43,309-314.
Gomi Yoichi, Noro Fumiyuki 2010 特殊教育学研究、47,6,457-469.
五味洋一・大久保賢一・野呂文行　2009　アスペルガー障害児の授業参加行動への自己管理手続きを用いた学級内介入、行動療法研究、35,1,97-115.
Hanley P. Gregory & Nicole A. Heal, Jeffrey H. Tiger & Einar T. Ingvarsson 2007 Evaluation of Classroom Teaching Program for Developing Preschool Life Skills. Journal of Applied Behavior Analysis, 40,277-300.
Heal A. Nicole, Gregory P. Hanley, & Stacy A. Layer 2009 An Evaluation of the relative Efficacy of and Childrens' Preferences for Teaching Strategies that Differ in Amount of Teacher Directedness. Journal of Applied Behavior Analysis,42,123-143.
Hirasawa Noriko, Fujiwara Yoshihiro, Yamane Masako 2009 Physical Arrangement and Staff Implementation of Function-Based Intervention in School and Community Settings.
特殊教育学研究、46,6,435-446.
Hoerger L. Marguerite & F. Charies Mace 2006 A Computerized Test of Self-Control Predicts Classroom Behavior. Journal of Applied Behavior Analysis,39,147-159.
Lang Russell, Tonya Davis, et al. 2010 Functional Analysis and Treatment of Elopement across Two School Settings. Journal of Applied Behavior Analysis,43,113-118.
Lang Russell,Mark O'Reilly, & Wendy Machalicek, Giulio Lancioni & Mandy Rispoli and Jeffrey M.Chan 2008 A Preliminary Comparison of Functional Analysis Results when Conducted in Contrived versus natural Settings. 2008 Journal of Applied Behavior Analysis,41,441-445.
Lang Russell,Mark O'Reilly, Giulio Lancioni, et al. 2009 Discrepancy in Functional Analysis Results across Two Settings: Implications for Interventions Design. 2009
Journal of Applied Behavior Analysis,42,393-397.
金山佐喜子・小野昌彦　2007　保健室登校児への教室登校支援、 行動療法研究、33,2,157-169
興津富成・関戸英紀　2007　通常学級での授業参加に困難を示す児童への機能的アセスメントに基づく支援、特殊教育学研究、44,5,315-325
道城裕貴・原節子・山本千秋・田中善大・江口博美・松見淳子　2008　模擬授業場面における就学前の発達障害児の授業準備行動に対する行動的介入、行動療法研究、34,2,175-186.
道城裕貴・野田航・山王丸誠　2008　学校場面における発達障害児に対する応用行動分析を用いた介入研究のレビュー：1990-2005　行動分析学研究、22, 1, 4-16.
村中智彦・小沼順子・藤原義博　2009　小集団指導における知的障害児童の課題遂行を高める先行条件の検討―物理的環境と係活動の設定を中心にー、 特殊教育学研究、46,5,299-310.
文部科学省　2006　通級による指導の対象とすることが適当な自閉症者、情緒障害者、学習障害者又は注意欠陥多動性障害者に該当する児童生徒について（通知）
Ndoro W. Virginia & Gregory P. Hanley, Jeffrey H., Tiger, and Nicole A. Heal 2006 A Descriptive Assessment of Instruction-Based Interactions in the Preschool Classroom. Journal of Applied Behavior Analysis, 39,79-90.
野口美幸・飯島啓太・野呂文行　2008　攻撃的行動を示す特定不能の広汎性発達障害の児童に対する機能的アセスメントを用いた介入、 行動療法研究、34,2,163-173.
岡部一郎・渡部匡隆　2006　発達障害のある生徒の余暇活動の自発的開始の指導、特殊教育学研究、44,4,229-242.
岡村章司・藤田継道・井澤信三　2007　自閉症者が示す激しい攻撃行動に対する低減方略の検討

2007　特殊教育学研究、45,3,149-159.
岡村寿代・杉山雅彦　2007　引っ込み思案幼児への社会的スキル訓練―相互作用促進と問題行動の改善―、 行動療法研究、33,1,75-87.
及川康・宮崎眞　2008　授業参加行動に困難を示す生徒に対する支援―病弱養護学校在籍児における「カリキュラム介入」技法の適用―　特殊教育学研究、46,2,115-124.
大久保賢一・福永顕・井上雅彦　2007　通常学級に在籍する発達障害児の他害的行動に対する行動支援―対象児に対する個別支援と校内支援体制の構築に関する検討―　2007　　特殊教育学研究、45,1,35-48.
大河内浩人　2007　行動分析の知識　行動分析. 大河内浩人・武藤崇編著、ミネルヴァ書房、Pp.3-12.
大石幸二　2006　特別な教育的ニーズのある中学生の学業適応促進を目指した校内支援体制の整備、行動分析学研究、20,1, 53-65.
Rasmussen Karina & Robert E.O'Neill　2006　The Effect of Fixed-Time Reinforcement Schedules on Problem Behavior of Children with Emotional and Behavioral Disorders in a Day-Treatment Classroom Settings. Journal of Applied Behavior Analysis, 39,453-457.
Selingson Erin Petscher & Jone S. Billey　2006 Effects of Training, Prompting, and Self-Monitoring on Staff Behavior in a Classroom for Students with Disabilities. Journal of Applied Behavior Analysis,39,215-226.
杉山尚子　2005　行動分析学入門、集英社新書
高橋史・小関俊祐・嶋田洋徳　2010　中学生に対する問題解決訓練の攻撃行動変容効果、行動療法研究、36,1,69-81.
田中善大・鈴木康啓・嶋崎恒雄・松見淳子　2010　通常学級における集団随伴性を用いた介入パッケージが授業妨害行動に及ぼす効果の検討―介入パッケージの構成要素分析を通してー、行動分析学研究、24,2,30-42.
Waller D. Rachael & Thomas S. Higbee　2010　The Effects of Fixed-Time Escape on Inappropriate and Appropriate Classroom Behavior.　Journal of Applied Behavior Analysis,43,149-153.
吉田裕彦・井上雅彦　2008　自閉症児におけるボードゲームを利用した社会的スキル訓練の効果、行動療法研究、34,3,311-323.

要　約

本稿は、近年海外で学問的常識として使用されている行動分析的アプローチを学校支援、学級内での使用をした研究論文についてのレビューである。国内外の主な学術誌に2006年から2010年10月まで掲載された「学級内での行動分析的介入」についての論文について検討した。発達障害、情緒障害、行動障害の問題をもつ場合の幼稚園児から青年までを対象に介入した論文である。過去16年間の論文数と比較すると、海外では割合が多くなっているが、我が国では、行動分析的アプローチの論文が以前よりも少なくなっている。これは、我が国ではまだそれだけ一般的なアプローチではないと考えるのか、それを行える専門家が少ないのか、あるいは受け入れる側の学校の問題であるのか。すべての要因が重なった結果であるようである。しかし、障害児の支援だけでなく、障害を持たない子どもたちへの社会スキルの訓練が行われていることを考えると、健康、予防という観点からは進歩の兆しが伺える。